

菊澤小松園遺句集



菊澤小松園遺句集

とらうから操火女共させぬ浦即ち街
小松園

善人の学とれまゝの手で政介
小松園

女も世帯のつとめを
勤めたる

小松園

侍やんぢ女最
短距離
離れ
たふ

小松園

序 文 西 尾 棗

勿頸の友小松園さんの遺句集の序文を書くことになった。この序文を書くに相応しい人は、岩本雀踊子さんか、矢っ張り僕だろう。

昔、膝栗毛の中に弥治郎兵衛と喜多八が活躍する、弥次さんは喜多さんより年量であったから、さしづめ弥次さんは小松園さんで、私は喜多さんである。どちらが先に死んでもわびしくも哀しい。火箸は先からの譬への通り、弥次さんの小松園さんは、昭和五十九年二月にあの世へ旅だった。

彼と知り合ったのは昭和十年頃だったが、彼の柳歴はずっと古く大正年間に始まっている。だから遺句集を編纂するにあたっては、若葉時代から数へて集めてゆくと遅々として進まなかった。

こうしてペンをもって見ると、句もさること乍ら、二人で出かけた旅から、団体の旅行へと思いが続く。

丁度今から十五年前に、清水白柳の遺句集を発刊するにあたり彼は序文に代えてという序文を書いている。

彼は小柄で身が軽かった。だから彼の仕草や動作は剽軽で身体全体が既に川柳になっていた。それでも亦滑稽で、ユーモアというような上品なものでなく土臭い庶民的な滑稽であった。

泥棒の逃げた窓から首を出し

なんて句は皆から激賞されていたし、

年上の女と入るてっちり屋

窮すれば通ず女の名は言わず

等即座に女百句をものにしたものである。

所謂、好作家で彼の性質から醸し出す、ウィットと回転の早い血の巡りが彼の饒舌となりそのまま川柳だった。彼の饒舌については兎や角言う人もあるけれども、それは彼の善人性と人なつっこい性質からきたもので私は常に彼の味方だった。この遺句集にそんな句が、珠玉の如く入っている。

編集するにあたり、膨大な句集めに、史好、凡九郎、小路の方々が努力され、選句にあたっては、天笑、美幸、智子、柳伸の各氏が寸暇を惜んで一生懸命になって下さったことを感謝申上げる。

小松園さんは晩年不幸にもベッドの入院生活だった。この句集を繙いて、彼を偲び彼を敬慕して下さいの方が一人でも多いことを念願して序文とする。

彼岸過ぎ

水鶏庵にて

某識

目次

序文

西尾 栞

釣鐘の由来を聞いてから鳴らし	1
大阪の住所は橋の名で覚え	9
人間と暫し争う仁王の眼	17
人は善好んで遅刻などしない	27
善人の節くれ立った手で殴り	39
寿と書けばきれいな金に見え	53
泥棒の逃げた窓から首を出し	67
笛吹けば鹿より先に人が寄り	85

美しき恋に終りぬ大和仮名	97
年上の女と入るてっちり屋	119
長男は血の気の多い頃生れ	131
寝るだけのことに夫婦の身づくろい	137
思い出のスナップ	154
しのび草	津守柳伸	156
小松園さん	黒川紫香	156
小松園さん	塩満敏	157
小松園さんの思い出	金井文秋	158
小松園宅納涼句会の思い出	西田柳宏子	159
あとがき	河内天笑	162

釣鐘の由来を聞いてから鳴らし

白一色土地の女と差向い

ひとりはぐれてあやしきまでの月の暈

旅先の昼の月さえ見遁さず

旅人へくらしの棹と見えぬなり

春の鐘みどりの森へ一文字

雲は旅人振り返りもせず別れ

花を追う蜂は故郷の山を見ず

鼻欠けてから野仏の拝まれる

金泥の剥げたは知らぬ仏の眼

箒目に砂のいのちは生かされる

九輪水煙塔の静かに黙否権

水子地蔵のぐるりも春の花が咲き

ふるさとの月はいつでも晴れている

御仏の肌吹く風も明日香みち

満開の花は年増の美しさ

草の露罪の深さを見せて落ち

月の浮く水を汚してなるものか

人知れず咲いて峠で散るさくら

泥に咲く蓮とはゆかぬ世と悟り

柳老いてしなだれ掛るものもなし

若草山風のある日と見えぬなり

大阪の住所は橋の名で覚え

地下鉄を出て四天王寺をさがし

大阪に居ます住所は書いてなし

だまされて見たい妓に逢う法善寺

金のあるうちは大阪よいところ

持ってきた地図も焼跡間に合わず

めし焦げる匂い野良犬立ち止まり

裏通り曲りくねってやっ
と着き

いつ死んでもよいのがピン
ピンしてはりま

塔の下親子三代飴を売る

各停で話のつづきをするつもり

親の名で訪れば座布団上座なり

群鶏の一鶴ついに嫁き遅れ

尾行しているのに道を尋ねられ

俄か雨靴のかかとが取れかかり

二階から世間の裏を見て下宿

道具屋の店曝しなる観世音

欺された同志で飲んでる新世界

春うらら吉祥天女の御ひとみ

人間と暫し争う仁王の眼

雲流るいま物言えば嘘になる

野心ない眼にはきれいな花ばかり

生々流転どの石ころも丸うなり

生きていれば何とかなるさ雲流る

淋しさにひとりへひとり会いにゆく

運命を決める小銭が裏返り

一期一絵人間として握手する

雑草の役目だ目立ってはならず

真すぐに歩けば風も従いてくる

運はないされど聖書は手離さず

張り倒してやりたい横顔そこにあり

過去という魔物の前に立たされる

神様に時々脳をいじられる

何れの日私を許す火とならん

凡人に徹す静かに風を聞く

我を焼く煙はさぞやどす黒い

父の眼を覗く子供になっている

父という立場で座る真四角

愛情のない香水を匂わすな

垢抜けのした挨拶で先き帰り

告白はやっぱり畳の部屋にする

親切が身に泌む人について行き

簡単にあやまることも生きる手か

能面の涙は腹の中へ落ち

すぐ消える虹を誰にも話さない

アンコールの利かぬ人生たそがれる

死の覚悟出来て命を大事がり

人は善好んで遅刻などしない

とどめ刺す一本の矢は手離さず

和に徹し人より遅い怒りよう

根の深さあれも抜かねばこれも抜かねば

冷めしを詰めても弁当箱である

よく光る星をみんなが危ながり

生活のゆとり冷たい人に見え

筆とれば墨は明治の艶となる

草書では判らず行書で物足らず

起承転結筆に命のある如く

よう食えもせぬのにカントだデカルトだ

人をみな燕雀にして孤高なり

詩を論じ髪は雀の巢の如し

行き届く言葉嬉しく疲れ切り

女難の相と当人だけおもい

散髪に文句の言える顔かいな

その勇氣褒めて若気をたしなめる

弥次郎兵衛揺られながらも考える

褒めてほめて相手を思う壺に入れ

焦っては損だと軽い咳払い

言訳の中に組まれてゆく喜劇

歪んでる芯と気付かず独楽まわる

腹割って話し足許すくわれる

誘惑に克って戻れば齒がうづく

囿りかも知れず手ぶらで先ず当り

はらからと言う言葉さえ耳ざわり

顔の皺ころの皺に気が附かず

焦点をずらす言葉に人間味

女癖他人は氣輕う褒めてくれ

瘦せたなど口には出せず久し振り

悩んでるところが若い者とはずれている

言訳はなかなかうまい駄目な奴

癖のない人で皆から忘れられ

鍍金でもここまでくると見上げられ

善人の節くれ立った手で殴り

ややあつてチップの利いた顔になり

有頂天頭の程度疑がわれ

ちりれんげ日本人のいい感度

栓抜きを待ってる阿呆らしさ

苦しさを紛らす酒も借りた金

板前を褒めて料理は食べのこし

冗談をまともに受けて酌ぎこぼし

息抜きに出した酒から揉めてくる

真先に酔うて本音に触れさせず

女世帯螺子のゆるんだままつかい

二の足は母の涙の声で止め

素うどんへ身の振り方を考える

喋りつづけてその内幕にふれさせず

雨もりのだんだん派手に落ちてくる

若い母乳首噛まれた声になり

蓋割って猫の茶碗になり下り

隣からいいことだけを聞かされる

そうめんの一本のどにひっかかり

階段へ派手に落とした金だら

出直して来ますと手土産持って去に

無理をした金に水引掛けて出し

仏さま嫌いなものを供えられ

電話帳の上に十円置いて去に

思い切り叩いた猫はうちの猫

正体は知らぬが売薬効いてくる

祝酒派手にこぼして目出度がり

味の変らんうちに仏壇から下げる

よりどりへ思わぬ人の手が絡み

慣れ初めのはなしになった咳払い

妊ってから迷信を笑わない

住み慣れて山の起伏も目に入らず

窓閉める音へ隣も窓を閉め

ごきげんの日の毒舌は冴えてくる

奢られるメニューの値段見てしまい

酔いさめてから割勘のことに触れ

慰安会下戸には惜しい芸を持ち

酔醒めの水を刑事が運ぶなり

家のこと問えばフーテン空を見る

黒眼鏡の下でおどおどしている目

寿と書けばきれいな金に見え

齡不惑そんな笑顔で欺されず

灰皿へ呉越の煙纏れ合い

ぐるりから揺れやめさせぬ彌次郎兵衛

親戚はみんな甲羅に身を堅め

明治百年置いてけぼりにされただけ

本当の働き雑布になってから

毒舌を本人だけが気がつかず

真ん中の真んまん中で見失う

蠟燭のもいちど燃える風を待ち

うるさ型 柀目の通った下駄を履き

疲れ切る独楽は惰性でなお回り

本当の湯治は隅の方に寄り

人形のへその辺りに何も無い

黒板を拭くと書きたくなってくる

人が居てそれから塔が出来上り

一つ宛配って余るはずがない

本当の事を言うから憎まれる

停電になっても立呑みあわててず

算盤の音を受話器へ響かせる

泣く時の眼鏡邪険に扱われ

一杯の水一杯の酒ほどに礼言わず

救急車昨日の現場見て通り

働き蜂死んで花輪を送られる

神棚に人のくらしのいく曲り

病人が静かになつて覗き込み

諦めて覗く死顔鼻高し

骨壺にまだ尋ねたいことがある

毒舌は止みぬ息するのも熄みぬ

病院も医者も信じて死んでゆき

切っぱ詰まってからの信心眼が据わり

人間ドッグ以来神経質になり

霊柩車パンクしたまま家の前

真すぐに桂馬跳びたい日もあろう

禿げかけているのにお手の早いたち

骨壺になってもあの人温かい

人妻になつてゆとりのある言葉

十二月ゆるい鼻緒で追っかける

材料を聞いた途端に箸を置き

平常着のままが一番泣いてくれ

泥棒の逃げた窓から首を出し

何方から見ても寿めでたい字

あぐらのまま命に関わる話する

言訳はどうにてもつくベルを押し

靴かわる位ですんだ三りんぼう

ままごともしさい世帯より知らず

乳が出るだけではないと子も気付き

人が見ているので仲のよい夫婦

新しい母というのが飲み込めず

親善の仮面乾杯させられる

有頂天ぐるりの人が近よらず

結婚へあたりの風をなぎ倒し

世間体考え過ぎて恥が増え

近視眼落さぬ錢も拾って来

延着の汽車で日の出を拝まされ

親類の出世頭が寄って来ず

地獄にも何ぞあったか笑い声

新建材妙な匂いで焼け落ちる

くずれまいと積木も努力しています

印相を変えたところへドルショック

ノッポビル環境権に噛みつかれ

観光バス汚ない町は早く抜け

要求の通らぬままに飯にする

影日向なく働いて馘になり

血を売った金で子供に会いにゆく

親一人子一人警察から電話

土木課の車がはねた水溜り

P T A 茶の間の知恵で渡り合い

南無阿弥陀仏で避ける世間の風あたり

十三時そんな時計が見当らず

パートタイム女に広い稼ぎ場所

かけ持ちの芸の荒れたに気がつかず

役すめば元の無口なコメディアン

ほとぼりは醒めたと当人だけ思い

食うための裸おどりを嗤えるか

あやふやな心で通う臨時工

帯止めになるとは勲章知らなんだ

搜索の検事ピアノの蓋も開け

やけくそと知らぬ度胸を褒められる

セメントで村の歴史を塗りつぶし

団地みな十八円の乳をのみ

敬老会の時は白髪のまま出掛け

すべり台よい子は列を乱さない

国会で躰の悪い野次が飛び

揉めそうな男定刻通り来る

押売りの断り方も柔と剛

愛想ないけど嘘はない販売機

雨だれへ神経質な造成地

人間の限界という金メダル

ピストルが手許にあっただけのこと

案ずれば切りがない世の判を押し

モーニング今日は小銭の要らぬ日ぞ

笛吹けば鹿より先に人が寄り

尺取虫メートル法の風にゆれ

鳴門では魚の涙も渦になり

生まれては死ぬぼうふらを見て飽かず

金網を距てて鼠の親と子と

金網をかじって鼠あきらめず

鼠とりの中の鼠の眼がきれい

人間にはじめて会ったひよこの瞳

自らを弔う虫がすすりなく

どの虫もみんな鳴いてるよ
うに見え

さくら貝明日は他人に拾われる

陥し穴の底から狸月を見る

鶏の下から閉じる眼を見詰め

芸をするイルカは親の顔知らず

真珠抱いてから憶病なあこや貝

眼力はさほどではないひきがえる

クラクション位でのかぬ奈良の鹿

籠を出てからを小鳥の考えず

蟻の列週休二日など知らず

あひるの子飛べる翼と信じきり

虫二ひきうれしい姿とも見えず

人間が勝手に附けた名鬼ひとで

屋上に値札のついた虫が鳴く

陳列の中の草月流が枯れ

玄関に花の個性が歪められ

揉めている土地とは知らずかきつばた

崩れ落ちても牡丹の美しさ

咲く時の風を蕾は考える

邪魔になる枝がいちばん蕾つけ

古清水の花の多きを嫌う瓶

月に鳴く虫と人間思い込み

からくりの冴え人形に血が通い

浮いている草とは知らず縋りつき

考古学終に化石が笑い出す

美しき恋に終りぬ大和仮名

ひかえ目の恋を歌麿絵にのこし

夕月に女の匂う薄あかり

埋れ火のままに世間がしておかず

意地捨てて逢いに行く日の小糠雨

月ひとつ無い夜だから危ながり

握手もう他人ではない握りよう

女にも世間があつて今日逢えず

撒き餌だと知つてきれいに身をかまし

情のある手とは思えず払いのけ

いつまでも待って居ますを持ってあまし

泣きやんで女最短距離撰ぶ

いい加減な男とぼちぼち判りかけ

肝心なとこ鼻声で聞きとれず

散髪をして何処へ行く春の宵

悩みある人とは見え舞い納め

面影を抱いて返事はまだ出さぬ

くもりのち雨を覚悟で二人会い

打ち明けるつもり終点近くなり

新緑の災い女が欺まされる

ネクタイを結んでくれる顔の距離

流れ星女の返事またのびる

サービスの限界人妻としての距離

暇乞いやっぱり惚れてはったのか

コーヒー掻き廻して女の眼を見つめ

恋人の耳のかつこうまで覚え

スケートのポーズも恋になっている

円満に別れてきたとぬかしたり

野いちごを一緒に摘んだだけの仲

手を握ったままさようならさようなら

欺されてみるのも愛というものか

かりそめの恋と止り木知っている

唇を多少ずらして何になる

握る手がだんだんきつうなる花火

附いていく女もおんな昼ひなか

月冴えて差す手引く手も絵の如し

しんきくさい恋だと思うすだれごし

時計止まったのを気がついている二人

一たんは拒むつもりがそのまま

暖房が消えたも二人気がつかず

石けんの泡で男の香をのがれ

音立てた頃の乳房のピンク色

灯を消して女しばらく物言わず

底抜けの陽気は恋を捨ててから

笑い飛ばして女は過去に触れさせず

お幸せですかと女白々し

月おぼろ妻ある人の手と感じ

生活に戻る虚しき恋なりし

諦めて見れば何でもない女

途中からこっそり女乗ってくる

罪深い下着が風に揺れている

スイッチは女の方の手で断られ

傷ついた方は女と限ってず

再婚の決った体をゆっくり洗い洗う

帯解けば帯も蛇体のうねりもつ

膝ぼしで押して返事を迫られる

心中沙汰男ぎらいであった筈

お師匠はんと出来て古顔みんなやめ

老いらくの恋足許をかばい合い

御用済みのかたちに乳房たれ下り

白骨になっても女の方を向く

女かなしや裏地の赤を捨てかねて

ほろ酔いの光源氏という気持

匂いまで抜けた女と差し向い

年上の女と入るてっちり屋

風の音女素肌で聞きたがり

女の場合油断したでは済まされず

真逆さまに女の墜ちた美しさ

罪深い女と見え
ず黄八丈

手枕の女正体
見せはじめ

唇を噛んで悪女に
甘んじる

灯を消して女の業のあからさま

人妻の隙だらけなる温かさ

凝脂玲瓏として湯をはじく

ぼろ糞に言いに行くにも化粧する

女ですもの齡に関りない願い

跳ねのけて女かなしや疼くもの

腰ひもの数だけ女苦勞する

西鶴の頃から女拗ねる癖

女もう実のなる木だけを愛す齡

本腰になると女は距離を開け

強いこと言うてもおんな乳が張り

裾さばき女は意地を見せて去る

連れまいて女特価へ引き返えし

疑うてうたごうて寡婦礼を言う

庭づたい操を護る足袋はだし

奥の手があつてその場は女負け

泣いても女勘定間違えず

老いてなお女には職ありあまり

美容院出て二三間足早し

筆の立つ才女で手紙ひまが入り

再婚の決った体をゆっくり洗い洗う

金のある阿呆へ嫁いで行きました

ストリップお前はもとへ帰れぬ身

浮世絵の美人は靴の履けぬ足

窺すれば通ず女の名は言わず

絵にしたい恋は明治もなかばまで

長男は血の気の多い頃生れ

結んで開いてやがてこの子も悩むだろう

二日酔長女に水を頼むなり

羽搏いて一矢報いる子になれよ

あゝしてもやれたと思う子を死なし

親の手ではたちの裾をなおされる

揉めてても肉親恥をかばい合い

明治大正昭和と生きて手内職

一子相伝コツは何にも書いてなし

一本の道にもあつた突き当り

現実はそのろばん合わぬまま昏れる

乗りかえは利かぬ命をかけた職

働けば食えた時代の座りだこ

拳握っても笑顔に戻らねばならぬ職

風鈴の音へ内職手をやすめ

前祝内輪ばかりで手を叩き

寝るだけのこと
に夫婦の身づくろい

一すじの道はるけくも二人して

安らかな寝息見詰められてるとは知らず

挫折した日から本当の夫婦なり

似たとこにだんだん気附く夫婦なる

妻にもう一つの顔があつて午後

肩抱いて花火見たも二た昔

ただ一人の他は人間嫌いなり

もうこれで安心という日に逢わず

牡と牝静かな檻になつてくる

手を伸ばせば届くところにある乳房

手さぐりで互いに肉塊となり果てる

下手な考え休むに似たり寝てしまい

触れなば落ちん風情に遠く先に寝る

ストレスを背中合せに寝てしまい

としよりの抵抗床から出やはらず

雨模様言いたいことはたんとある

艶っぽい話になって爪を刈る

笑わない夫婦にいつかなくなっている

初耳の顔で終りまで聞いてやり

ぼやくだけばやいて先に寝てしまい

片意地を通して微熱まだ続き

大声のわりに何でもない用事

玄関に椿一輪客もなし

死なば仏わたしを拝んでくれる人

旅に出て夫を頼る妻となり

靴べらは妻の手にあり妥協癖

ゼロゼロと夫婦に無事な日が続き

何んとのう女らしさはまだ残り

てっちりへ初めてという箸になり

妻と来れば変哲もない砂の浜

石けんの泡の中からまだぼやき

倦怠期空腹のまま寝てしまい

二日酔うつらうつらと愚痴を聞き

寒椿乳房のあたり温かい

お互いに知りすぎている円満さ

無理なこと言うても妻は怒らない

女もさるもの笑顔で迎えてくれる

肩に手を添えた写真を妻かくし

箸枕元来我が家平和主義

見られてもよい日の財布放り出され

方向音痴足は元来丈夫なり

湯本温泉にて

湯けむりの中に女としての妻

ダイヤモンドヘッドを照らす月となり

ホノルルの夜景眠るのが惜しい

よい加減にしといて来いとあの世から

思い出の
スナップ



昭和56年8月茗人忌の帰り鳥取白兔海岸で柳伸さんと



昭和51年7月
堺吟行鳴門観潮
月子と千万子さんに挟まれて



どんぐり十周年句会 49. 6. 16 於大萬

昭和46年9月5日
「たけはら」の駅で

河内 天笑
浜田久米雄
田中 好啓
香川 酔々
菊沢小松園
高杉 鬼遊
河口 月子

昭和55年1月5日
天笑居新年会

藤井一二三
岩本雀踊子
宮西 弥生
菊沢小松園

同日帰路車中で

寺井 東雲
西尾 葉
菊沢小松園
西田柳宏子

昭和49年6月
堺川柳会榎尾山吟行の日

新谷 笑痴
和田維久子
宮尾あいき
金井 文秋
河野 君子
菊沢 スミ
河内 天笑
菊沢小松園



しのび草

津守 柳伸

「閉会の辞」これは知る人ぞ知る小松園師のニックネームであった。先生ほど柳社を問わず句会出席をされた方はおられなかったのではないだろうか。戦時中も空襲の間を縫って故白柳師と夜通し歩いて帰る事もたびたびあったそうです。小柄な身体に想像もつかぬファイトの持ち主で毎朝身体をコンチャクのようにした体操「ヨガ」を続けておられたそうです。鬼百句、女百句などを毛筆で書き残されたのはご承知の通りで大変な達筆家です。

また、よく電車を乗り違えてまさに閉会の辞で駆け込み出席されても悲壮感はなく不思議に和やかな雰囲気を持っておられました。二次会の水炊きなどお鍋料理の時はつき足し等全部先生の役目でした。家ではさせてもらえないから、なんて楽しんで作句の話や艶話で刻を過し帰り際には必ず熱いお茶を飲まれ、星空を眺め乍らいつも口癖のように「このまま風呂に入ってお迎えが来てくれれば湯灌がいらないのだが」と子供の様な笑顔で、誰方にもわけへだてなく接して下さる本当に素晴らしい先生でした。遺句集発刊の運びになり心からご冥福をお祈り申し上げます。

小松園さん

黒川 紫香

「紫香さん、路郎先生に内緒でこれ賞品にしといて」

と其の当時川柳雑誌社本社句会のお世話をしていた私にそつと自家製の餅焼金綱をよく持って来られた。

小松園さんとはじめてお会いしたのは、まだ川柳雑誌社本社句会が南の誓得寺で開かれていた頃だったと思う。

こだわらない言葉で新米の私を引き立てて声をかけて下さった。お会いした其の日色白で美青年だなど思い、役者さんかなと感じた程である。

長いおつき合いだったが、私は酒が飲めぬので余り逸話は知らない。古い句だが、

泥棒の逃げた窓から首を出し

というユーモアたっぷりの句がいつも私の脳裏から去らない。

小松園さん

塩 満 敏

京の風土と伝統にみがかれた雅な女性像を描きつづけ、女性で文化勲章第一号受章者の上村松園（M八〇S二十四）さんにあやかり、雅号を「小松園」としたというだけあって、「女」を詠んではピカ一。「川柳塔」誌上にも、連作「女の一生より」（S四十九年一月号No五六〇）等発表しておられます。

小松園さんは、達筆で、川柳大阪四〇〇号記念大会（S五十一年三月二十日於大交會館）には、祝吟を条幅にしたものをいただきました。

川柳大阪五〇〇号記念大会（S五十九年七月八日於中央公会堂）の折りは、残念ながら鬼籍に入られたので、「色紙」「短冊」を会場で展示し、記念合同句集「あゆみ」誌上に十句収めました。

小松園さんの思い出

金井文秋

私が小松園さんと知り合い親しく付き合うようになったのは、昭和三十年頃川柳雑誌社阿倍野支部（南大阪川柳会の前身）句会へ出席してからの事である。

当時小松園さんは五十歳ぐらいの働き盛り髪の毛は黒々としていて、いかにも若々しかった万年青年という異名も持っていたようである。いつも若く居る秘訣は、おしゃれをしていることと異性を思っていることだそうだ、つまり浮気ごころを持っていることらしい。

小松園さんに言わせると、浮気ごころのないのは赤ん坊と癡人ぐらいのものらしい。それを実践されていたかどうかは別として実に女の句はうまかった。なんでも川柳に行き詰ったら女の句を作るんだそうだ。そのうちにスランプを抜け出すことが出来ると何度も聞いている。彼の天分なんでしょうね。字の上手なのも定評がある。喜び事の記念句会や追悼句会などには、掛け軸の大きさの紙に墨痕淋漓と大書した献句を、自分の仕事だとばかり続けておられるには何時も感心していた。短冊色紙にもよく乗る文字だった。

ふだんウィットのある冗談をよく言われた。そして他人をよく突かせていた。或る日こんなことを言

われた。弔辞や追悼の言葉には、よいことばかり言っているが、自分も死んだらあんなもんやろか一ぺん生きてる内に自分に言うてくれる内容を覗きたいものだと言っておられたが、いや本音だったかも知れない。

宗教についても悟りに近いものを持っておられたようで、断片的だが輪廻や因縁の話なども質問に応じて答えておられた。自分はいつお迎えが来てもたじろがぬ用意があるなどというっておられた事がある。

健康の為にと続けておられたヨガの体操が裏目に出、脊髄損傷で入院されたと聞いた時多くの川柳家に大きなショックを与えたようだった。その後一年程して二度目のお見舞に行った時、髪が大半白くなっていたのには驚いた。病気でこんなに白くなったんですかと聞くと、いままでは染めていたんですよと返事が返ってきた。当時私も染めていたんですが、染めているのを他人に気付かせぬようにするには、半月毎に手入れをしないとすぐばれてしまう。その点小松園さんはおしゃれだったんだなと思う感を深くした。

四年にわたる治療の効なく遂に黄泉の旅へ出られた小松園さん。いま頃は旅のつれづれに冗談でも飛ばしながら楽しくやっておられることと思う。

小松園宅納涼句会の想い出

西 田 柳宏子

昭和三十九年頃の「川雑あべの句会」即ち現在の南大阪句会の前身であるが、毎月松崎町の松江梅里

氏宅大萬の二階で開催されていたが、当時清水白柳氏の手によって阿倍野筋八丁目（現王子町四丁目）に新築された小松園氏宅三階建屋上ベランダ納涼句会をやるうということになり、七月、八月の二ヶ月の句会を小松園氏宅で行うことになった。

間口の割に高い三階建、一階の仕事場の奥から割に急な階段を登り屋上に出る。有あわせのゴザを敷き座布団を並べたり、植木の横に腰かけたり、星空を仰いでの納涼句会が始まったが、思ったより風もなく暑い句会だったと皆愚痴ったものを思い出す。

更に八月句会の際は準備整え開始寸前から雲行怪しくなり雨になって慌てて三階の座敷に移って句会をしたのも思い出になっている。奥様や娘さん方に随分お気遣いさせたことと思います。

因みに当日の出席者、秀句、小松園氏の入選句を記載する。懐しい名前、亡くなられた人の名前が見受けられます。

◎七月句会（昭三十九年七月二十日（月））

優勝句 傷ついて帰る故郷の水入らず 宮西弥生

出席者 松江梅里・若本多久志・川村好郎・本田柳志・清水白柳・菊沢小松園・今西章雅・山本素郎

浅川八郎・宮尾あいき・宮西弥生・西出一栄・酒田清子・城一舟・本庄金三・中川滋雀

不二田一三夫・吉岡美房・金井文秋・世井井平・傍島静馬・小川恒明・永宗義・和田痴亭

稲本凡子・宮地双葉・島田雄峯・桑田喜代子・西田柳宏子

おはなし

清水白柳

席題「星 空」

席題「久しぶり」

兼題「早 計」

兼題「七 夕」

兼題「水いらす」

兼題「中 毒」

○小松園氏の入選句

星空に詩情も湧かぬ年になり

星のデート人間共を意識せず

土砂降りに七夕の笹軒に入れ

痩せたなと口には出せず久し振り

本当に懐しい思い出の句会でした。

稲本凡子選

西田柳宏子選

菊沢小松園選

本田柳志選

川村好郎選

若本多久志選

あとがき

河内 天笑

昭和六十年二月川柳堺の例会を「菊澤小松園一周忌句会」として小松園さんをお偲び申し上げる句会を致しました。当日の句会には西尾葉主幹はじめスミ夫人もご出席になり句会終了後に参加者全員の拍手で「菊澤小松園遺句集」の発刊が決まりました。

「川柳雑誌」「川柳塔」をはじめ各地の句会吟や大会吟を洩れなく網羅して集った句が一万二千句を越えたのは師の輝かしい柳歴を物語っています。

句集の纏め方として最初は各章毎にふさわしいタイトルを考えましたが、果して小松園さんに満足していただけるかどうか疑問となり、結局は起承転結としての大きな流れで纏めました。「起」には旅の句と基本的な物を捉える目を「承」には日常生活を「転」には恋と女の句をそしてご夫婦のくらしの句を「結」

と致しました。

小松園さんのすばらしい一句一句にふれる事の出来た幸せを感謝すると共に句集編纂にご尽力賜わった里小路、津守柳伸、小出智子、谷垣史好、高杉鬼遊、神谷凡九郎、藤井一二三、大路美幸、塩満敏の各氏に御礼申し上げます。

最後に、遺句集発刊が予定より二年半も遅れた事を心底からおびと致しました。

菊澤小松園 略歴

本名 菊澤藤三郎
明治37年12月25日 大阪市谷町に生る
大正14年11月 川柳作句活動をはじめ
昭和10年2月3日 スミ夫人と結婚
昭和16年1月 不朽洞会員になる
昭和59年2月22日 堺労災病院にて死去
(川柳塔社副理事長)

菊澤小松園遺句集

【定価 二、〇〇〇】

昭和六十二年九月一日

発行日

河内天笑

編集人

西尾 棗

発行人

川柳塔社

〒545 大阪市阿倍野区三明町二一十一十六

ウエムラ第二ビル二〇二号室

電話 〇六一六二九一六九一四番

印刷所

ホウユウ株式会社